

## 2011 年度 IARU GSP 参加報告書

参加したプログラム：シンガポール国立大学（NUS）Asia Now! Southeast Asian Cosmopolitan Urbanism

期間：2011 年 6 月 27 日—7 月 15 日

### プログラム概要：

Domesticity という大きいテーマで、いくつかの小さいテーマに分けて、マレーシアのマラッカという町に行って資料収集やインタビューなどを行い、最終的に NUS Baba House Museum で展覧会を準備する。また、1500 字程度の individual essay を提出する。

### プログラム日程：

6 月 27 日—授業、班分け、登録手続き

6 月 28 日—NUS Museum 見学、授業

6 月 29 日—NUS Baba House Museum(展覧会の場所)見学、ウォーキングツアー

6 月 30 日—ディスカッション

7 月 1 日—シンガポールからマラッカ（マレーシアの町）へ出発、ウォーキングツアー

7 月 2 日から 10 日まで—マラッカで資料や artifact 収集、インタビュー、展覧会のアイデアを考える

7 月 11 日—シンガポールへ出発、NUS Baba House Museum で準備作業

7 月 12 日から 14 日まで—NUS Baba House Museum で準備作業

7 月 12 日—プレゼンテーション、展覧会開幕

### 参加動機：

まず、世界中トップレベルの大学から集めた学生たちと交流し、英語で授業を受けてみたかった。また、このプログラムのテーマは自国の歴史的な町マラッカについて展開するため、マレーシア出身の私にとって、自国の歴史や文化への勉強や再発見にもなる。

### 現地での生活：

シンガポールにいる間、大学キャンパス内の宿舎 Prince George's Park Residences 個室が提供される。大学キャンパス内にシャトルバスサービスがあつて、非常に便利である。キャンパス外へ行くとき、公共交通機関の MRT（電車）、バス、タクシーなども便利である。マラッカにいる間、Baba House ホテルの二人部屋が提供される。大学の宿舎の部屋も、ホテルの部屋もインターネットが使える。

キャンパス内にたくさんの食堂や飲食店がある。食堂内中華料理、インド料理、マレー

料理、韓国料理、日本料理などが売られている。その他、マックドナルドなど飲食店もある。

費用：

非常にありがたいのは、授業料と宿泊料が免除される。

感想、学んだこと：

現地に行く前、インターネットに記載されているこのプログラムに関する情報だけ見たら、**field work** や **exhibition** など専門的な言葉が書かれていて、実際にこのコースにかかわっている分野を勉強したことがない素人の私にとって非常に大変かもしれない思った。しかし、このコースのテーマにひかれ、今までやったことのないクラスルーム外の勉強にチャレンジしてみたいという思いで現地に出発した。

展覧会を準備する際、一番難しかったのは、マラッカでどのような情報や **artifact** に出会えるか誰にもわからなかったということであった。授業の初めの日にチームとテーマに分かれていても、最初のシンガポールにいる何日間は、心配していても、ぼんやりとしたアイデアのディスカッションと背景資料の読み物しかできなかった。逆に、まだ準備の作業ができないから、授業の時間以外けっこう自由な時間ができて、他の参加者たちと少し観光や遊びに行くことができた。マラッカにいる間も、資料探しや **artifact** 収集などの作業は基本的に町中に行われているから、かなりの町見学もできた。一番良いと思ったのは、かなりの自由度があることであった。テーマが与えられていても、テーマに対する解釈はかなり自由で、こうでなくてはならない、そうしなくてはならないような縛りはあまりなかった。展覧会の名さえも参加者たちの意見によって決められた。

このコースでは、すべての仕事は個人作業ではなく、チームワークで進められた。このおかげで、仕事の効率はよくて、マラッカからシンガポールに戻った後かなり短い時間で展覧会の仕上げができた。しかし、高度な分業は長所ばかりではない。特にコースの後半に、最初のようなテーマによる班分けではなく、グループは仕事種によって再編成され（例えばビデオを作成するビデオグループ、展覧会のデザインを決める展覧会グループ、買出しや **artifact** 運搬をするロジスティクスグループなど）、各グループは各自の仕事だけに集中していくため、全体的なアイデア交換のチャンスがほとんどなくなって、最終デザインへのアイデア反映が難しくなった。

実際に体験してみたら、このコースは想像ほどきつくはなかった。これもチームワーク作業のおかげである。たとえ自分は専門のソフトウェアで展覧会のパンフレットをデザインする方法がわからなくても、グループ内それができるメンバーたちがいるから、彼らの

力を借りて、かなり質の良いパンフレットを仕上がるのが可能となった。もし経験のない私は自力で一からやらなくてはならなかったら、仕事の量がかなり多くなるばかりでなく、デザインのいい作品を出すことも難しいであろう。このコースを通じて、自分のパソコンスキルの足りなさに痛感した。また、自分の英語力のレベルの低さも感じた。ディスカッション中、うまく英語で自分の意見を述べることは難しかった。私にとって、アメリカやシンガポール出身の参加者たちの英語は比較的に聞き取りやすかったが、イギリスやインド出身の参加者たちの英語を聞き取りにくかった。

授業の方式について、NUSと東大の間大きい違いを感じた。このコースでは、インターネットが非常に活用されていた。まず、現地に出発する前、参加者たちはすでにこのコースの **facebook** グループに招待された。ちなみに、コースの担当先生もそのグループに入られている。担当先生は **facebook** に授業に関する指示をポストするだけでなく、授業中にとった写真やビデオもポストしてくださった。インターネットを通じて、先生と生徒の距離はここまで縮まったことに非常に驚いた。また、先生は授業のスライドや **reading list** をインターネットにアップロードしてくださることは学生にとって非常に便利である。

日本の夏休みは海外大学とずれていることに気になった。他の海外大学はすでに夏休みに入ったにもかかわらず、東大生にとって、コースの期間にまだ休みではなかった。レポートの締め切りや期末試験などたくさん詰まっていた、現地で東大の宿題を書いたり、期末試験の勉強をしたりする必要がある人も多かったから、全力を尽くしてコースに集中することが難しかった。これは東大生が海外の交流プログラムに参加することを妨げる一つ大きい理由であろう。

最後に、このコースを通じて、違う環境と文化の大学で勉強してみることができ、各参加校の学生と交流しあい友達になることもできて、良い思い出がたくさんあって、このプログラムに参加してよかったと思う。大変世話になった東大側と NUS 側のスタッフや教員方々に心からお礼を申し上げる。

## IARU GSP 2011 参加報告書

### プログラム : Asia Now! Cosmopolitan Urbanism

今回参加した交換留学プログラムでは、“Domesticity”をテーマに1週間マレーシアのマラッカ州でフィールドワークを行いました。まちを歩き、現地に住む人々の話を聞き、映像や写真を撮り、最終的にはシンガポール国立大学の保有する歴史的建物で展示を行いました。このプログラムは全体的に講義を受けるというスタイルではなく、実践的な形式で学生が主体となり現地調査や本格的な博物館展示の構成と設営を行いました。

#### ● 学習テーマについて

“Domesticity”について調査・考察・発表するにあたって、Nationhood、Migration、Tourism、Community というサブテーマが教授によって設定され、生徒は各グループに分かれました。“Domestic”は英和辞書で「家庭の、家庭的な」及び「自国の、国内の」といった日本語で記されますが、今回はもっと広く、どちらかというと「内と外」という概念で捉えていきました。ポルトガル・オランダ・日本・イギリスに征服された歴史をもち、多様な人種と宗教が今日も共存し「内部」や「外部」が明確ではないマレーシアにおいて、国家、移住、観光、地域という4つの視点から Domesticity をみていくことは非常に興味深かったです。私は国家のグループに属し、イギリス人、ベトナム人、インド人、中国人、マレーシア人と一緒にまち中を歩き、現地の人達にインタビューを行いました。そのなかで国旗、硬貨、銅像など目に見えるシンボリックなものが表象する国家、政策を通じた国家形成、人々の日常生活における国家など、様々なレベルで Nationhood と Domesticity をみていきました。日本では「国家」の概念が日常において希薄であることを認識していましたが、他国においても国側が作り上げている「国家」のイメージが強固であっても、実際の人々の生活レベルでは非常に曖昧なものであるということを見出し、面白かったです。

#### ● 成果発表について

シンガポール大学がもつ博物館の学芸員の協力の下で、様々な媒体を使って本格的な展示を作りあげました。マラッカでグループごとに行っていた調査と話し合いをシンガポールに持ち帰り、展示に向けてみんなの思考プロセスと見解を整理していきました。パンフレット、映像、写真、インタビューの引用、ブログ、小物展示など、あらゆる表現方法を用いて発信しようとするのは難しい反面、ビジュアルなものが多くて作り上げた後の達成感がありました。シンガポールの博物館でやった展示は、後程シンガポール大生によってシンガポール大学が保有するマラッカの博物館でも展示されました。

## ● 学習環境について

参加者は東京大学 3 人、北京大学 3 人、イェール大学 1 人、UC バークレー 3 人、オーストラリア大学 1 人、ケンブリッジ大学 2 人、コペンハーゲン大学 2 人、ニューデリー大学 2 人、シンガポール大学 7 人ほどで、計 24 人中 6 人が男子でした。大半が学部 3、4 年生で、文系から理系まで様々な専門の人がいました。課題は最終レポート以外になかったもので、大体毎日 17~18 時頃まで作業をして、夜は夕飯を食べにいたり観光をしていました。一つ残念だったのは、このプログラムでは教授よりも学芸員の人と関わることの方が多く、講義も最初に 2 回ぐらいしかなかったことです。実践的なスタイルはよかったです。海外の大学教授による講義をもっと味わいたかったです。

## ● 生活環境について

シンガポールにいる間は大学の寮に泊まっていた。個室で、シャワーやお手洗いもきれいでした。マラッカにいるときは 2 人一部屋でちゃんとしたホテルに泊まらせてもらい、快適でした。シンガポールもマレーシアも食事が安くて非常に美味しかったのが印象的です。インド料理・インドネシア料理・中華料理・フュージョン料理など色々ありました。

観光は日々の課題がなかったので夕方からしていました。ただ、毎日作業があるためにまとまって休みはなく、マラッカやシンガポールから遠出をすることはできませんでした。

IARU で一緒になった友達とは現在でもネットを通してつながっており、良い経験となりました。私の参加したプログラムは思っていたよりも学生主体で演習中心でしたが、普通であれば日帰りで観光するようなまちを一週間歩き回り、まちの外観を越えて人の声を聞きだすことは面白かったです。学生や教員だけではなく、一般にも見せられるような博物館展示を作るのも良いチャレンジでした。IARU の応募時期に掲載されるプログラム内容では詳細がいまいちつかみきれませんでした。参加できてよかったと思いました。

IARU GSP 派遣プログラム  
National University of Singapore  
“Asia Now!”  
-Southeast Asian cosmopolitan urbanism-

参加報告書

## 1. はじめに

参加報告書を書くにあたって、まず初めに、何故私がこのプログラムに参加しようと思ったかについて触れておこうと思う。

私は地方から上京したのだが、二年も経つとすっかり東京の生活に慣れ、友人も増え、新しい知識も増え、高校生のときに憧れていた大学生活を楽しんでいたと思う。しかし、いざ2年間を振り返ってみると、

「大学生活で、死ぬほど本気で何かに取り組んだか？」

と聞かれると、自信をもって YES と言うことができないと感じていた。大学生活に感じていた何となくの物足りなさに加え、以前から海外生活や留学への憧れは感じていたので、この IARU GSP 説明会のチラシに目を奪われたのは必然だったのだろう。

説明会では、昨年度参加された方が話されており、「毎日、課題に追われて図書館に籠っていたが、あんな経験は初めてだった」「人生で初めて悔しくて泣いた」と言ったエピソードを伺い、東大の中では味わえないような経験ができそうだと直観的に感じた。

結果、選考も通過し、私は、東大では味わえない、本気で取り組む経験を得ることを、このプログラムでの目標とした。3週間のプログラムを通して、この目標がどのような形で達成されたかについては最後に触れることにするが、以下、プログラムの詳細内容およびそこで感じたことを綴っていきたいと思う。

## 2. プログラムの概要

【内容】Asia Now! Southeast Asian cosmopolitan urbanism

シンガポール国立大学内及びマラッカでのレクチャー、フィールドワークを通じて、community / tourism / nationhood / migration の4つの観点から、マラッカの Domesticity がいかにして形成・維持・発展されているのかを調査し、成果をNUSの博物館にて展示・発表する。

【参加学生】東京大学4名 NUS8名 イェール大学1名 UCバークレー校3名 オーストラリア大学1名 北京大学3名 ケンブリッジ大学3名 コペンハーゲン大学2名 デリー大学2名 計27名

【スケジュール】

日時	場所	活動内容
June 27	Singapore	概要説明、レクチャー①、レクチャー②、キャンパスツアー
June 28	Singapore	博物館ツアー、レクチャー③
June 29	Singapore	成果発表会場見学、チャイナタウンツアー
June 30	Singapore	グループワーク
July 1	Sin/Melaka	移動、マラッカツアー
July 2	Melaka	マラッカフィールドワーク
July 3	Melaka	マラッカフィールドワーク
July 4	Melaka	マラッカフィールドワーク
July 5	Melaka	中間報告会
July 6	Melaka	マラッカフィールドワーク
July 7	Melaka	マラッカフィールドワーク
July 8	Melaka	マラッカフィールドワーク
July 9	Melaka	マラッカフィールドワーク

July 10	Melaka	マラッカフィールドワーク
July 11	Sin/Melaka	移動
July 12	Singapore	発表準備
July 13	Singapore	発表準備
July 14	Singapore	発表準備
July 15	Singapore	成果発表会、懇親会

### 3. プログラム内容詳細、感想

#### 【レクチャー】

参加学生の多くが、シンガポール・マラッカを訪れることは初めてであったので、まず初めに担当教授より二地域の歴史的背景についての説明があった。両国ともに、古くから東西問わず交易が盛んであったため、多様な文化が流入・融合し、様々な形で現代に残っているということが共通点だという話があった。また、Domesticity という概念が、非常につかみにくいものであるため、ビデオや文献引用等によって補足がなされた。子人為的には、3週間のプログラムであるにも関わらず、講義の日程が2日間しかなく、またメインの活動となるフィールドワークの手法/目的などについては、ほとんど説明がなされなかったため、参加者のほとんどが社会学/都市基盤学を専攻していなかったために、のちで苦勞することになった。この二点については、プログラムの更なる向上のためには改善が望まれるだろう。



#### 【博物館、会場見学】

最終発表形態が博物館での発表であったため、既存の施設に赴き、作品展示の効果的手法やテーマ/展示内容設定の過程の重要性についての話があった。博物館キュレーターも期間中プログラムをアシストしてくれたため、キュレーター職はそれまでほとんど知らなかったのだが、彼女らの視点について触れることができたのは良かったと思う。

#### 【チャイナタウン/マラッカツアー】

レクチャーであった二地域の文化的特異性が、実際、街の風景の中にどのような形で立ち現われているのかについて参加者全員で地域を回ることによって観察することができた。

#### 【フィールドワーク】

4つのグループに分かれて、展示発表の材料となるような資料集めを行った。具体的には、local へのインタビュー、施設見学を行った。私が思う問題点としては、グループテーマに関して深い考察をする前に、「何を展示すれば見栄えが良いか」といった、着地点を見越しての議論ばかりしていたことだと思う。展示は、その背景にある意味づけが入念になされていてこそ、初めて目に見える展示が映えると思うので、指摘できなかった自分にも多分に落ち度はあると反省してい



る。実際に街に出て、見たもの・触れたもの・感じたものを、バイアスをかけずに知識をもって分析し解釈していれば、展示内容もより深まったように思う。

#### 【発表準備、展示発表会】

シンガポールに帰国してからは、マラッカで見つけたもの（モノ/映像/音声/写真）を展示物に変えていく作業を行った。作業場所や工具が少なく、あまり順調に作業は進みまなかったが、前々日・前日に参加者全員が一致団結して準備に取り組んだ結果、見応えのある内容が完成し、来場者の多くからも賞賛と労いの声が上がった。ただ、キュレーターの方の意見が手厳しく、



なかなか学生の意見が通らずそこで非常に苦労した。今、思えば、上述したように身のある展示物を学生側が提示していれば、うまく交渉が進んだかもしれない。ただ、結果、一つのことを皆で作り上げる、という機会に巡り合えたことは非常に良かったと強く感じている。



#### 4. 反省/おわりに

「大学には味わえない、本気で何かに取り組む経験をする」という目標を掲げて 3 週間を過ごしたわけだが、目標の 8 割も達成できなかった、というのが本音である。自分の甘さに依るところがその原因の大半を占めているだろう。プログラム中に主だった課題がなかったとはいえ、仮に個人であっても自発的に学びに行く姿勢が必要だったと感じる。また、事前準備が参加者全員に強要されなかったため、皆、手探りの状態でワークに取り組んでいたように思う。これは、参加者の団結力を高めた一方で、学術的精度を十分に引き上げられない結果へとつながったように思う。

ただ、このプログラムが私自身に与えた影響は、期間中でなく、日本に帰国した後に具体的に現れてきたように思う。それは、

①全力で取り組めなかった悔しさ・反省をバネに、大学生活にフルコミットするようになったこと

②グローバルな視点が培われ、進路選択の幅が広がったことが挙げられるだろう。

今後もこの経験を活かして、大学生活に、そして人生に本気で取り組んでいきたいと思う。

